

[課題演習概要]

中学生の学習意欲を育むガイダンス授業での試行的支援の検討

坂 本 昌 弥

Masaya SAKAMOTO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
教職教育高度実践力プログラム

(2023 年 1 月 10 日受理)

キーワード：学習方略，ガイダンス授業

1 研究の目的

子どもの学びへの動機づけの重要性が指摘され（清水・橘川，2009），小学生と比較して，中学生で勉強が好きと回答した割合が低下している（ベネッセ教育研究所，2014）。こうした状況から，平成 29 年告示の学習指導要領（文部科学省）では，育成すべき資質・能力として，認知能力である「知識及び技能」，「思考力・判断力・表現力等」の 2 つとともに，非認知能力である「学びに向かう力・人間性」が重要であることが示された。また，岡田（2007）は，学習意欲と関連の深い学習方略に着目し，高校生を対象に英単語学習において，学習方略の教授により意欲が伸びることを示した。

以上より，教職に就く者は，生徒の学習等へのモチベーションを引き出すことができるようになることが必要だと考えた。本研究では，生徒が学習方略を使用できるようになったかを確認することにより，学習意欲の向上を見取る。

2 研究の計画

福岡県内公立 A 中学校第 3 学年を対象に生徒の学習意欲の向上を目指したガイダンス授業とそれを効果的なものとするための個別的支援を行った。まず 1 学期期末考査に向け，ガイダンス授業-個別支援 Ver.1 として試行した（図 1）。その後，内容を改善し，Ver.2 として本実践を行った（図 2）。



図 1 ガイダンス授業-個別支援 Ver.1 の研究デザイン図



図 2 ガイダンス授業-個別支援 Ver.2 の研究デザイン図

3 研究の内容

研究 1

(1) 目的

研究 2 に向けて，学習意欲の向上を目指した授業を試行し，その内容や評価について検討を行う。

(2) 方法

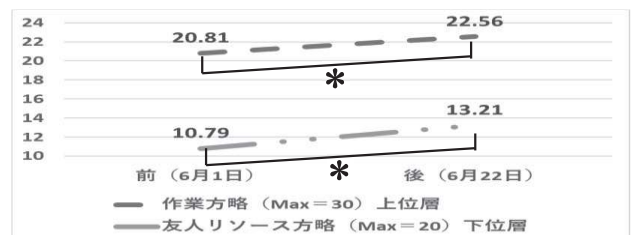
時期：2022 年 6 月

対象：TA 実習Ⅲ 配属学級（中学 3 年 34 名）

内容：生徒の学習意欲を引き出す手立てを見出すことを目的とし，期末テストに向けたガイダンス授業を報告者が行い，生徒支援として個別のコメントを送る。その授業の生徒への定着を分析する。評価：授業前と期末テスト終了後（授業実施から 3 週間後），授業とコメントが学習意欲の向上に効果があったか，学習方略の使用尺度（佐藤・新井，1998）を用いて，多肢選択式（5 件法）の質問紙法による実態把握を行い，分析・検討を行う。自由記述は，記載されている目的で集約化することができる KJ 法（川喜田，2017）を用いて分析を行う。

(3) 結果と考察

質問紙調査から，前後の差を検討したところ，偏差値 50 以上の高群では，声に出して覚える・参

図 3 授業前後の学習方略の使用尺度 t 検定結果

考書を事前に準備するなどの作業方略について、後が前よりも有意に高かった。偏差値50未満の低群では、友人関係を利用して学習を進める友人リソース方略について後が前よりも有意に高かった。

ガイダンス授業の感想(自由記述)を KJ 法(川喜田, 2017)により分析した結果, 28 名が学習法(プランニング 9 名, 改善点 5 名, 友達の学習法 4 名, テスト準備 3 名)について具体的に記述しており, 2 名がガイダンス授業について記述していた。

また, 報告者の個別のコメントを計画や学習に取り入れたと答えた生徒は 18 人(60%)であった。

以上より, 学習意欲の向上を目指して実施したガイダンス授業については, 全生徒がテストに向けた取り組みを前向きに行おうとしていることや 28 名が学習法について述べていることから, 生徒の学習意欲の向上についての具体的な意識づけができたと考える。また, 高群(成績上位層)には作業方略, 低群(下位層)には友人リソース方略で, 使用度の変容が認められた。よって, 学習の定着状況により, 異なる側面で生徒の学習意欲の向上との間に関連性があることが示唆された。

研究 1 から 4 ヶ月後の学級担任への聴き取り調査で学習方略の定着に課題が見られたことから, 研究 2 では, フォローアップとして, テスト後の授業で取り組みの整理のために内容の省察を行う。

研究 2

(1) 目的

報告者が生徒の学習意欲の向上を目指したガイダンス授業と全体指導を効果的なものとするため, 個別的支援を行う。これらの支援が, 生徒自身が学びの課題を見出し, 自分に合った方法を見つけ, 取り組むことを促進することができるか検証する。

(2) 方法

時期: 2022 年 10 月～11 月

対象: TA 実習Ⅳ 配属学級(中学 3 年 34 名)

内容: 生徒の学習意欲を引き出す手立てを見出すことを目的とし, 期末テストに向け学習方略の獲得を目指した授業(ガイダンス授業 1)を行い, 個別支援として, 各生徒に学習支援のコメントを送る。期末テスト終了後に学習方略の定着を目指

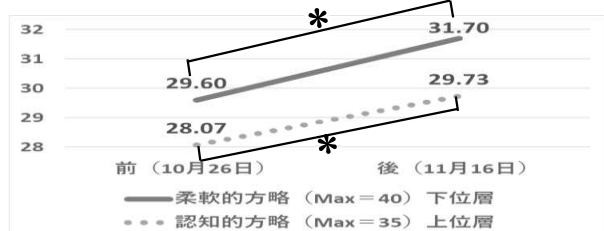


図 4 授業前後の学習方略の使用尺度 t 検定結果

した授業(ガイダンス授業 2)を行い, 分析する。
評価: 授業前と期末テスト終了後(授業から 3 週間後)に, 授業とコメントが学習意欲の向上に効果があったか, 研究 1 と同様の方法で結果を統計的に分析・検討する。自由記述は, キーワードで集約されるテキストマイニングを用いて分析する。

(3) 結果と考察

質問紙調査から, 事前・事後の時期の比較を検討したところ, 偏差値50以上の高群では, 内容を相互に関連付けたりすることで学習内容の理解を深める認知的方略について, 有意な上昇がみられた。偏差値50未満の低群では, 学習の進め方を自分の状態に合わせて柔軟に変更していく柔軟的方略について, 有意な上昇がみられた。

授業の感想(自由記述)を KH Coder(樋口, 2020)を用いて分析した結果, ガイダンス授業 1 の感想は, 「頑張る」や「取り入れる」などの言葉が使われていた。また, ガイダンス授業 2 の感想は, 「受験」や「取り組む」などの言葉が使われていた。

以上より, 学習意欲の向上を目指して実施したガイダンス授業 1 は, テストへの取り組みを前向きに行おうとする姿勢が伺えることから, 生徒の学習意欲の向上についての具体的な意識づけができたと考える。また, フォローアップを目的として実施したガイダンス授業 2 は, 生徒が今後を見据えていることが伺えることから, 学習方略の定着の具体的な意識づけができたと考える。さらに, 成績上位層には認知的方略, 下位層には柔軟的方略で, それぞれ使用頻度の向上が認められた。よって, 学習の定着状況により, 異なる側面で生徒の学習意欲の向上との間に関連性があることが示唆され, 指導面で有益な実践的知見が見出された。

4 成果と課題

個別支援を伴う学級全体へのガイダンス授業は, 有効な学習支援の 1 つになることが示唆された。一方, 今回用いた学習方略の尺度が 25 年前に開発されており, 再度尺度の信頼性や妥当性を確認するなど有効性を検討したい。また, 実践学級が 1 学級のみであったため, 今後は他学年や他学級でも実践し, 中学校全学年での効果的な個別支援とガイダンス授業の在り方を検証する必要がある。

主な引用・参考文献

岡田いずみ 2007 学習方略の教授と学習意欲-高校生を対象にした英単語学習において- 教育心理学研究, 55, 287-299